

室町期の博多商人宗金と東アジア

佐伯，弘次

<https://doi.org/10.15017/1866707>

出版情報：史淵. 136, pp.101-121, 1999-03-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



室町期の博多商人宗金と東アジア

佐 伯 弘 次

はじめに

室町時代の博多商人宗金は、日朝貿易や日明貿易で活躍した貿易商人として著名であり、当該期日本の貿易商人を代表する人物の一人である。そのため戦前以来多くの研究が蓄積されている。

戦前に博多貿易商人宗金を海外史料の中から発掘し、初めて専論を書いたのは有光保茂氏であった。¹⁾同氏は、主として『李朝実録（朝鮮王朝実録）』から宗金とその家系を考察し、宗金やその子孫たちが日朝・日明外交上重大な役割を演じたこと、ならびに遣明船の派遣に深く関係したことを明らかにした。宗金に関する具体的な事実関係はここではば網羅的に提示されている。従来から部分的に注目されていた宗金を本格的に検討し、東アジアの中で位置づけた先駆的な研究である。

戦後、豊田武氏は『日本商人史 中世篇』²⁾の中で博多の貿易商人の代表として宗金一族をあげている。また、中世博多貿易商人の動向と博多がもつ貿易史上の意味を検討した田中健夫氏は、博多貿易商人の代表的人物として宗金を取り上げ、検討した。³⁾まず『教言卿記』に所見がある「円福寺僧宗金」と『老松堂日本行録』に出てく

る「石城僧宗金」は同一人物の可能性があることを指摘し、宗金の生涯を、応永二十七年（一四二〇）を境として、それ以前を「僧侶としての宗金の時代」、それ以降享徳三年（一四五四）八月の死までを「商人としての宗金の時代」と時期区分し、後者を「商倭である時代」と「石城管事時代」の二つに区分した。そして宗金の朝鮮貿易のあり方に五つの形態があることを示し、図書だけに頼った九州諸氏の貿易に比べると、その量ははるかに大きかったことを指摘された。これらの指摘のうち、円福寺僧宗金と石城僧宗金が同一人であるという説は、上田純一氏によって支持され、研究が深められている。³⁾

中村栄孝氏は、室町時代の日朝関係における宗金の事績について指摘されている。³⁾とくに九州探題の凋落によって受図書人が普及していく際の早い例として宗金を位置づけているのは注目される。室町期北九州諸氏の朝鮮貿易を検討した田村洋幸氏は、世宗五年（一四二三）から同八年にかけて貿易の拡散化が進行し、九州探題・河川氏に代わり、宗金のような中小の通交者が増えることを指摘している。³⁾『海東諸国紀』に出てくる日本の朝鮮通交者を網羅的に検討した有光有学氏は、宗金一族を受職人の類型と捉えた。³⁾有光保茂氏が作成した宗金家の系図を一部増補し、さらに貿易の実態を検討して、「宗金一族は、一族で日朝・日中両国の貿易に多角的に参加し、当時の最高級品やきわめて多種類の品目や数量を扱う国際的な海外貿易家であった」と結論づけた。受職人は朝鮮から官職を与えられた者を意味するので、これを朝鮮通交者の階層の一つとして理解するのは必ずしも妥当ではないし、宗金自身は受図書人であり、受職人にはなっていないが、結論自体は首肯しうるものである。

以上の研究をふまえて、私も、「石城管事」と称した宗金と都市博多の関係を検討し、宗金は室町期に大友氏領博多息浜の代官であったと推定した。³⁾

以上のような研究によって、宗金と朝鮮・明との関係やその貿易の実態はほとんど明らかになっているかのようであるが、さらに検討すべき課題も残されている。宗金の朝鮮貿易や外交交渉の実態は、従来の研究をふま

てさらに深められるべきであるし、日明貿易の時期については再検討が必要である。従来明らかにされている歴史的事実も含めて、宗金と東アジアとの関係を私なりの視点から検討してみたい。

一 宗金の朝鮮通交開始と受圖書人化

(一) 宗金の朝鮮通交開始の契機

円福寺僧宗金と石城僧宗金が同一人ではないとすると、宗金が初めて文献上に登場するのは、応永二十六年（一四一九）の応永の外寇時である。この年六月に朝鮮軍による対馬攻撃すなわち応永の外寇（己亥東征）が起こるが、九州探題渋川氏は、博多の「居僧」宗金を京都に派遣してこれを室町幕府に報告させた。⁹宗金は將軍足利義持の側近陳外郎（宗寿）にこれを報告し、陳外郎が義持に報告した。宗金の活動は、その初発から九州探題ならびに室町幕府と密接であった。この時宗金がなぜこうした重大事を幕府に伝える使者になったのかが問題である。この時の宗金はたんなる九州探題の使僧ではなく、宗金がすでにそれ以前から畿内と博多を往来する僧形の廻船商人であり、九州探題が畿内と交易活動をする宗金を使者として利用したものと解釈したい。翌応永二十七年（一四二〇）の朝鮮使節宋希環の来日に際し、宗金は博多において宋希環をもてなし、一行の上京に際しては、みずから船に乗ってこれを護送したのは著名な事実である。¹⁰

宗金の朝鮮通交の初見は、世宗二年（一四二〇）十一月である。「石城商倭宗金」は、九州探題渋川義俊やその家臣板倉宗寿・板倉満景らと同時に使者を朝鮮に派遣し、土宜を献上した。¹¹石城商倭とは博多商人を意味する。これはまさに宋希環の帰国直後であり、宋希環の来日時における宗金の功績が、朝鮮貿易へ発展進出する契機になったという有光保茂氏の理解は妥当であろう。¹²ただし、応永の外寇の戦後の日朝交渉に宗金が最も功労があったという評価は過大評価である。

田中健夫氏は前述のように、商人としての宗金を商倭時代と石城管事時代に時期区分された。私は、朝鮮通交権の有無によって宗金の朝鮮通交を二時期に時期区分したい。宗金の朝鮮通交の第一期は受図書以前期（一四二〇年十一月～一四二五年十月）であり、第二期は受図書人期（一四二五年十月～一四五〇年）である。まず第一期の朝鮮通交を一覧表にすると、表1のようになる。

表1 宗金の朝鮮通交（第一期）

西 暦	年 月 日	内 容	献 上 品	回 賜 品	備 考
一四二〇	世宗二・一一・己丑	遣人來遺土宜	土宜	綿布七〇匹	世宗三・一・己巳
一四二二	三・六・乙丑	遣人獻土宜	土宜	綿布五〇匹	三・八・丁巳
一四二二	三・一一・乙亥	遣人獻土宜	土宜		
一四二五	七・一・丁丑	使人獻	鍍金酒旋子・鐵鉄	正布一九〇匹	
一四二五	七・一〇・戊寅	使人來獻土宜	土宜		

以上のように、第一期ののべ六年間に五回の通交がある。いずれも自身が渡航するのではなく、使者を派遣する使送倭人としての活動である。頻度としては一年間に〇・八三回の通交である。とくに通交初期の実質一年間に三回の通交があることが注目される。また、九州探題渋川氏やその家臣と同時通交していることが多く、とくに板倉満景との同時通交が多い。渋川氏とその一族・家臣の朝鮮貿易を実質的に担ったのは博多貿易商人であることがすでに指摘されているが、宗金もその一人であった可能性が高い。

（二）宗金の受図書人化

世宗七年（一四二五）十月に朝鮮に遣使した宗金は、同月、通交の証となる圖書を朝鮮から給与された。^①こうして宗金は受圖書人となり、正式な朝鮮通交権を獲得した。この宗金の受圖書人化が、日朝関係において受圖書人が普及する早い例であると位置づけられていることは前述の通りである。この宗金の受圖書人化の背景について中村栄孝氏は、九州探題の勢威の動搖をあげている。^②この問題をいま一度検討しよう。

宗金が朝鮮に圖書を求請し受圖書人になったのは、確固たる朝鮮通交権を獲得するためであった。それ以前の通交は、九州探題関係者との同時通交が多く、貿易面でも彼らの貿易を担っていたのではないかと推定した。しかし、実は制度上、九州探題と密接な関係を作らなければならない理由があつた。日朝関係は、太宗期から世宗期にかけて日本人通交者を制限・統制する方向に向かうが、その中に書契による統制があつた。朝鮮は、世宗元年（一四一九）冬、九州の通交者で朝鮮に遣使するものは必ず九州探題の書契を受けて来るように定め、翌年には対馬の通交者は島主宗氏の書契を受けてくるように定めた。^③したがって宗金の通交の第一期は、まさに九州探題の書契による統制が実施されていた時期であり、宗金が朝鮮通交を行うためには九州探題に接近せざるをえなかったのである。

では宗金がなぜ一四二五年（応永三十二）十月に圖書を朝鮮に求請したのかを検討しよう。宗金の受圖書人化の契機は、一般的には九州探題の勢威の動搖、ないし九州探題の日朝貿易における地位の凋落とされている。貿易商人宗金が永続性の強い通交権を志向するのは当然であるし、折しも日朝関係において授圖書の制が成立しつつあり、すでに板倉満景が受圖書人となっていたことは、宗金が圖書獲得を意図した大きな理由であつたと考えられる。しかし、それがなぜ応永三十二年十月であつたのかが問題である。従来、九州探題渋川氏の没落は応永三十年説と応永三十二年説があつたが、本多美穂氏の研究によって、応永三十二年説が正しく、渋川義俊の没落は応永三十二年七月ごろであることが明らかになった。^④したがって宗金の圖書求請はその直後ということにな

る。九州探題と近い宗金が、書契を発給すべき探題の没落を目の当たりにしたとき考えたのは、探題の權威に頼らない通交権の獲得であろう。最も現実的な方法は、登場したばかりの図書の入手であった。宋希璟来日の際の手厚い応接ぶりは朝鮮政府の知るところであり、宗金は図書を獲得することができた。宗金受図書人化の直接的契機は、中村榮孝氏と同様の結論となるが、日朝関係で重要な役割を担っていた九州探題の没落であると考えたい。

(三) 受図書人宗金の朝鮮通交

次に受図書人となった宗金の朝鮮通交について検討しよう。宗金の朝鮮通交としては第二期に相当する。まず通交の実態を一覧表化しよう。

表2 宗金の朝鮮通交(第二期)

西曆	年月日	内容	献上品	回賜品	備考
一四二六	世宗 八・二・朔	謝賜圖書	摺扇・樟腦・大刀など	正布二四〇匹	
一四二六	八・二・癸酉	使人献土宜	土宜	正布八〇匹	
一四二八	一〇・二・甲寅	致書	扇子・犀角・沈香など	正布二六匹	
一四二八	一〇・七・甲寅	宗金使送			別幅に圖書なく退けらる
一四二八	一〇・七・甲子	致書礼曹	土物	綿布二〇匹・正布一五匹・焼酒一五瓶	国王薨逝を報ず

一四二八	一〇・九・庚午	遣人献土物	土物	正布六七匹	
一四二八	一〇・二・辛卯	致書礼曹	土物	正布一四七匹・田犬二隻	
一四二九	一一・六・戊子	遣人献土物	土物	正布八五匹	
一四二九	一一・七・甲戌	遣人献土物	土物	正布二〇〇匹	
一四二九	一一・九・戊午	遣人献土物	土物		
一四二九	一一・二・辛酉	致書礼曹	土宜	正布七〇匹	朴瑞生を送る
一四二九	一一・二・己亥	遣人献土物	土物	正布一六八匹	日本国王所遣
一四三〇	一二・二・丁卯朔	遣人献土物	土物	正布一〇匹・綿袖二〇匹	
一四三一	一三・二・丙午	使送五人来遣土宜	土宜		日本国王使と同時
一四三一	一三・一〇・丙午	遣人献土物	土物	正布五一匹	
一四三二	一四・五・庚辰	致書礼曹	土物	正布一五匹	日本国王使と同時
一四三三	一五・六・壬寅	使人献土宜	土宜		
一四三四	一六・二・己酉	来献土宜	土宜		
一四三五	一七・九・甲申	所送人等来献土宜	土宜		
一四三七	一九・二・丙午	献六郎二郎等九人 来献土宜	土宜		
一四三九	二一・三・甲子	遣多羅時羅等九人 献土物	土物		
一四四二	二四・一〇・乙卯	遣其子来献土物	土物		

一四四四	二六・六・丁酉	招撫官を護送		正布四〇匹等	礼曹復書
一四四六	二八・九・乙酉	遣人献土物	土物		
一四四七	二九・五・乙未	遣人進香、致書礼曹	土物		世宗、宗金と引見
一四五〇	文宗 〇・一・丙辰	来献土物	土物	大藏経	大藏経を誦う

表2のように、第二期の一四二六年（応永三十三）から一四五〇年（宝徳二）までの二十五年間に、宗金は計二十六回の朝鮮通交を行っている。平均すると一年に約一回の通交である。この他、宗金の子家茂が通交したこともあり、これも宗金の通交を補完するものと捉えると、さらに通交頻度が高くなる。受図書人となったことによって通交権は強化されたことが、実際の通交からも判明する。また、ほとんどが使送人を派遣する使送倭人としての活動であるが、時に日本国王使として、あるいは進香などのために自身が渡海したことがあり、通交の内容も多様化したことがわかる。

二 宗金の朝鮮貿易の特質

次に宗金の朝鮮貿易の内容について検討しよう。

（一）通交の形態

宗金の通交の形態として、使人派遣と自身渡航がある。表一・二を見ると、ほとんどの通交が使人派遣であり、宗金の朝鮮通交の基本は使送倭人としての通交であったことがわかる。使人としては、子弟とそれ以外に分けられ、子弟では表阿古羅（兵衛五郎）が、それ以外では六郎二郎と多羅時羅（太郎四郎か）の二人が検出される。上

京の人数は、史料から判明する限りでは、五人から九人である。

また、自身渡航は一四二九年（永享元）、一四三四年（永享二）、一四四七年（文安四）、一四五〇年（宝徳二）の四回が検出される。一四二九年の渡航は、自身が日本国王使として渡海しながら、いっぽうで遣使をするという二重の通交を行っている。自身渡航はとくに晩年に多いが、日本国王使としての渡航以外では、被虜明人の送還や進香、大藏經求請が目的となっている。また、晩年に二回渡航していることは、毫岐の受職人藤九郎が宗金について礼曹官人に語った言葉中の「宗金之言曰、吾子三人、皆謁朝鮮国、独末子未謁、将伝圖書於末子」往謁朝鮮、面囑而死」の部分と符合する。ここで自身の通交権を子弟に継承させようという宗金の意図が指摘されているのは注目される。先に掲げた理由以外に、通交権の一族への確保という目的があったことは容易に推察される。

（一）輸出品

宗金の朝鮮への献上品は、ほとんどの場合が「土宜」「土物」であり、具体的な内容がわからないことが多いが、例外的に三回分は内容が判明する。

① 世宗七年（一四二五）正月丁丑条の献上品

鍍金酒旋子と鐵鉄を献上している。鍍金酒旋子とは、金で裝飾した酒器と考えられる。日本製の工芸品である。鐵鉄は鉾産物の錫である。

② 世宗八年（一四二六）十一月庚寅朔条の献上品

前年十月に圖書を受給した返礼として、宗金は摺扇一〇〇本・樟腦五斤・大刀一〇柄・犀角一頭・鑲金二〇斤・銅二〇〇斤・菴香一〇斤・硫黄一〇〇〇斤を献上した。摺扇・大刀は日本産の工芸品、銅・硫黄は日本産の鉾産物である。量的には鉾産物が最も多い。樟腦は、応永二十八年（一四二一）に前九州探題渋川道鎮が朝鮮に

送ったのが日本における初見であり、これは中国産の樟脳で、「南海—中国—日本」の間にあって中継貿易に活躍した琉球船によって中国産の樟脳が九州に将来され、朝鮮に再輸出されたと考えられている。²⁰ 藿香は薬材で、中国産とも東南アジア産ともいう。犀角は東南アジア産の犀の角で薬材、鬱金も東南アジア産の植物で薬材や黄色染料・香料に使用される。

③ 世宗十年（一四二八）二月甲寅条の献上品

宗金はかつて使者が朝鮮から厚くもてなされたことをのべ、かつ黒細麻布の恵贈を依頼して、扇子・犀角・沈香・朱折扶・蘇木・硫黄・麝香・大刀・土黄・銅・甘草・巴戟などを献上した。いわば黒細麻布の代価である。具体的な数量は不明である。

扇子・犀角・硫黄・大刀・銅は②と共通している。沈香はインドから東南アジアにかけて産する香木であり、薬用としても用いられた。朱折扶はおそらく朱折敷の誤りと考えられ、日本製の朱塗りの折敷（角盆）である。蘇木は東南アジアに産する植物で、紅色染料に使用される。麝香は不明であるが、名称からして南海産の香料かもしれない。土黄は漢方薬材かと考えられる。甘草は中国から東南アジアにかけて産する植物で、薬材に使用する。巴戟は正式には巴戟天という中国産の植物で、同じく薬材である。若干不明の物品があるが、基本的な構成は②と変わらない。

以上三回の物品の特徴をまとめると、日本産の工芸品、日本産の鉱産物、東南アジア産の薬材・香料・染料、中国産の薬材に大別される。中心となるのは日本産の物品であるが、とくに鉱産物が量的に多いのが特色である。また、東南アジアおよび中国産の様々な物品も含まれており、当時の博多においてこれらが入手可能であったことを示している。当時のアジアにおける交易の広がりを反映した献上品である。とくにこの一四二五年から二八年にかけては日明貿易が断絶していた時期に相当する。この時期に中国産物資が日本から朝鮮に輸出されている

ことは、琉球の中継貿易によってもたらされたと考えざるを得ない。

銅・錫・硫黄といった鉱産物は中世後期に活発に朝鮮に輸出された。²² これらを朝鮮にもたらしたのは国内の様々な地域と階層の人物であり、国内における鉱産物生産が活発であっただけでなく、その流通も活発であったことを物語っている。世宗十年（一二二八）正月の朝鮮通交時に宗金は、対馬の早田左衛門太郎・板倉満景とともに二万八千斤という膨大な量の銅を貿易港に持ち込み、朝鮮政府はこれを綿紬二千八百匹と交換させている。²³ これは同年二月に朝鮮に献上した銅とは別物であり、使船派遣に付随した宗金の貿易活動と位置づけられる。世宗二十九年（一四四七）には、宗金は朝鮮に対して「私物」を全て京に移して貿易せんことを願い、許されている。²⁴ 宗金の貿易活動の中心は献上―回賜という儀礼的な貿易にあったのではなく、それに付随した銅などの私物の貿易がむしろ主要であったと考えられる。したがって土宜・土物の献上のみしか記事にない場合でも、大規模な貿易活動を行っていたことが推定される。

一四三三年（永享五）に來日した朝鮮使節李芸は、京都からの帰路、尾道に寄港し、「博多倭人」の銅四千余斤を船に積み込んでいた。²⁵ このことから博多商人が中国地方産出銅の流通に深く関与していたことが判明する。宗金の銅貿易の背景には、こうした博多商人の瀬戸内―博多間銅流通への参画があったのである。

（三）輸入品

宗金の朝鮮への献上品に対する回賜は、表1・2のように綿布・正布（麻布）・綿紬といった繊維製品が主であった。また最後の通交では大藏経を求請し、三千八百卷の大藏経を与えられた。一商人がこれを与えられるのは、当時としては異例のことであった。この他、焼酒・田犬も与えられている。これらを一覧表にすると表3のようになる。

表3 宗金の朝鮮からの輸入品（回賜品）

品名	一期	二期	合計
綿布	一二〇匹	三〇匹	一五〇匹
正布	一九〇匹	一五〇九匹	一六九九匹
綿紬		五〇匹	五〇匹
焼酒		一五瓶	一五瓶
田犬		二隻	二隻
大蔵経		三八〇〇卷	三八〇〇卷

朝鮮から九州探題への回賜品は一四三三年（世宗五・応永三十）を境として、綿布から正布に変化していくとされているが、宗金の場合も同様の傾向がある。宗金ら三名の一回の銅貿易だけで、二八〇〇匹の綿紬を獲得しており、その量は回賜品中の繊維製品の総計を凌駕するものであった。したがって輸出品と同様、正式な献上・回賜貿易よりも、それに付随した貿易の量の方がはるかに多かったと推定される。

三 朝鮮通信使接待と日本情報の伝達

（一）朝鮮通信使の接待・護送

宗金が朝鮮通交を行う契機になったのが、朝鮮通信使宋希璟の接待・護送であった。通信使は博多を必ず経由するため、宗金にとって通交権をより強化するためにも、その接待は重要であった。

宗金の宋希璟に対する接待のあり方や京都への護送のあり方は、『老松堂日本行録』や諸先学の研究に詳しいの

で割愛する。一四二六年（世宗八）十二月、朝鮮の礼曹は博多商人平方行吉と宗金に関して、「至誠向慕、本国使臣之来往、尽^レ心厚待」とのべている。³⁸⁾ この時渡航した平方行吉の子二郎古羅（二郎五郎）と宗金の子表阿古羅（兵衛五郎）は、衣二襲が特別に下賜された。宗金は宋希璟だけでなく、その他の朝鮮使節も博多で接待したのである。

一四二九年（世宗十一）の通信使朴瑞生の帰国時に、通信使船の乗組員が二名病氣になった。朴瑞生はその送還を宗金に依頼したため、宗金は輕艦を發して二名を朝鮮に送った。³⁹⁾ 宗金はこの時、土宜を獻じて正布七〇匹の回賜を受けている。一四三三年（世宗十五）には、回礼使を護送したという功績によって、宗金の子は綿紬二〇匹を下賜された。⁴⁰⁾ 一四四四年（世宗二十六）には、博多から大内殿に到った朝鮮の招撫官康勸善を厚く館待し、その帰国に際しては、人を派遣して護送させた。⁴¹⁾ この時も宗金は礼物を獻じ、正布四〇匹・白細綿紬一〇匹・白細綿布一〇匹・黒細麻布五匹を下賜されている。いずれも田中健夫氏が指摘する「朝鮮使の護送に便乗する貿易」である。⁴²⁾ 朝鮮通信使の接待・護送がいかなる目的でなされたか明白である。

（二）朝鮮通信使との貿易

一四四三年（嘉吉三）に来日した朝鮮通信使に関して、当時の日本側の記録は「近來者爲商売所人來也」「非如先々商売之料也」と記している。⁴³⁾ 名目上は弔問や將軍就任祝賀のための外交使節であったが、実際には経済的な性格が強いと認識されていたことがわかる。

一四三三年（永享五）に来日した李芸の活動は、まさにそうした実態を物語っている。⁴⁴⁾ 博多に到着した李芸は、旧知の日本人の綿紬を船に乘せて出發した。その綿紬は広闊で高価であったので、朝鮮から持参した紬は価値がなくなり、予定していた光絹と漆を買うことが出来なかった。また京都からの帰途、李芸は尾道で博多倭人の銅四千余斤を積み込んだ。この旧知の日本人も博多倭人もともに博多商人であると考えられる。博多商人は、朝鮮

使節と連携して、自らの輸入品を日本で販売させ、中国地方産の銅を朝鮮に輸出しようとした。自らの貿易行為を朝鮮使節に代行させているのである。博多商人が使節を経済的に取り込んでいたといえる。この時の博多商人が誰であるのかは不明であるが、宗金の朝鮮使節接待・護送の実績からして、宗金も同様の行為を行っていた可能性がある。

(三) 宗金のもたらした日本情報と被虜人

宗金が朝鮮にもたらしたものは、献上品だけではなかった。日本国内に関する情報も朝鮮に意識的に伝達している。以下、それを検出しよう。

① 日本国王（室町殿）の交代

一四二八年（世宗十・正長元）七月、宗金は礼曹に致書し、「国王薨逝、其弟為^レ嗣」と報じた。⁽³⁵⁾ 国王とは室町殿を言い、具体的には足利義持をさしている。義持は正長元年正月十八日に没した。翌日、弟の義円がくじで後継者に選ばれ、三月十二日還俗して義宣（後に義教と改名）と名乗った。將軍となるのは翌永享元年（一四二九）三月十五日である。

この日本国王足利義持の死を最初に朝鮮に伝えたのは、対馬の早田左衛門太郎である。⁽³⁶⁾ この年の五月であった。次にこの情報を伝えたのが七月の宗金で、三番手が八月の小早川浄嘉（則平）であり、⁽³⁷⁾ 四番手が十月の少貳満貞であった。⁽³⁸⁾ 対馬および博多・大宰府の関係者が次々に室町殿交代の情報を朝鮮にもたらしたのである。国王の死や交代は、日本との良好な交隣関係を志向する朝鮮にとってはとくに重要なものであったと考えられる。

② 朝鮮通信使派遣に関する意見

日本国王の交代の情報を入手した朝鮮は、前国王の死を弔い、新国王の就任を祝賀する通信使派遣を企画した。これに対していち早く反応したのが早田左衛門太郎である。左衛門太郎は、この年の八月、朝鮮に書契を送り、

日本では戦争がまだ収まらず、通行が困難であるため、通信使派遣はしばらく停止した方がいいと提言し、世宗もこれに従った。³⁹⁾ 続いてこの年の十二月、宗金は「時氣向寒、遼海万里、風濤不穩」であるため、通信使派遣は春まで待った方がよいと意見をのべた。⁴⁰⁾ 朝鮮はこの意見も採用したらしく、通信使朴瑞生の一行為対馬に到着したのは翌年三月ごろであつた。⁴¹⁾ 宗金は朝鮮の日本に対する外交政策にも注目し、それに対する意見具申という形で外交行為を行っているのである。

③ 北部九州の動向

宗金は一四二八年十二月に通信使派遣に関する意見具申を行った際、北部九州の政治動向についても情報を提供している。北部九州の動向は、倭寇再発の危険性とも深く関わるため、朝鮮が重視していた情報であつた。宗金は、「方今、九州威權在「大友与大内二公」、若先遣「行人」、通「好於二公」、二公必傾倒焉」とのべ、九州で大友氏と大内氏の勢力が卓越していることを解説し、両氏への遣使を勧めたのである。この直後に大友氏が田犬を求請していることを伝えているので、求請実現のための情報とも解釈されるが、当時、北部九州において少貳氏の勢力が衰退し、大友氏と大内氏の勢力が伸張しつつあったことは間違いない。⁴²⁾ 朝鮮はとくに大内氏を重要視し、使者を派遣したり、贈物を送ったりしている。

④ 倭寇情報

朝鮮半島や中国大陆を襲撃した倭寇は、高麗末期には減少の兆しがあつたが、朝鮮初期の武断・懐柔政策によって急速に沈静化した。しかし、それは朝鮮半島のみのものであり、中国に対しては相変わらず倭寇活動を継続していた。一四三九年（世宗二十一年）三月、宗金の使人多羅時羅（太郎次郎）が慶尚道觀察使に対して、「賊方戸早田六郎次郎が中国に入寇しようとして宗貞盛らにいとまごいをした時、貞盛が『朝鮮の境を犯してはならない。もし我が言に従わず、朝鮮の境を侵犯したならば、汝の妻子を殺害する』とのべたため、六郎次郎らは天を

指さして誓い、『朝鮮の恩徳を厚く蒙っているのだから、どうして朝鮮の境を侵犯することがあるのか』と言った』と報告した。⁸³この時、宗貞盛は朝鮮に対する倭寇行為は厳禁したが、中国への倭寇行為にはなら言及していない点は注意しなければならない。中世の日朝関係は倭寇問題が常に根底にあったため、倭寇情報は朝鮮が最も欲する情報であった。それを熟知していた宗金や使人の多羅時羅は、入手した情報をいち早く朝鮮に伝えたのである。

⑤ 被虜人の送還

以上のように宗金は様々な有効な情報を朝鮮に伝えた。しかし、宗金が朝鮮にもたらしたものは、輸出品や日本情報だけではなかった。倭寇に連れ去られた被虜人の送還も行っている。一四二八年（世宗十）七月に朝鮮の被虜人二名を朝鮮に送還し、⁸⁴一四四七年（世宗十九）には明からの被虜人観音保を朝鮮に同行し、明への送還を依頼した。⁸⁵朝鮮は議論した結果、明への送還を決定した。被虜人の送還は朝鮮の歓迎するところであり、宗金はこのことを熟知していたものと考えられる。

四 日明貿易と宗金

宗金とその一族が日明貿易に深く関与したことは、すでに有光保茂氏以来の定説となっている。宗金一族は、室町期の博多日朝貿易商人を代表するだけでなく、中期の博多日明貿易商人を代表する存在でもある。

有光保茂氏は、『世宗実録』二十九年（一四四七）五月丙辰条の「宗金又言、予於正統元年与僧道淵朝于上国、帝賜道淵滿續袈裟、賜我段子二十四・絹四十匹」という記事を引用し、宗金が遣明船に加わったことを明らかにした。⁸⁶さらに有光氏は、正統元年は永享八年（一四三六）にあたり、道淵が入明したのは宣徳八年（永享五年（一四三三））であり、三年間の相違があること、正統元年にも遣明船が派遣されているので、この時に

も宗金が関係していたことによって正統元年と誤ったとも考えられることを指摘された。たしかに正統元年は第九次遣明船が帰国した年であり、龍室道淵は一四三二年（永享四）派遣の第八次遣明船の正使であるから、この記事に誤りがあることは間違いない。

この問題を検討してみよう。宗金が入明したのは第八次遣明船なのか、第九次遣明船なのか、あるいは両方なのかという問題である。一四三三年（世宗十五年）十一月、宗金の子家茂が朝鮮に遣使した。^②しかし、家茂は「通信之人」ではないので、その献上品を受け取るか否かが問題となった。この時の詳定所啓の中に「宗金輸款有^レ旧、今朝^二于上国^一」という記事が見えてくる。これによると一四三三年十一月当時、宗金は上国すなわち明に渡航していたことになる。これは龍室道淵が正使であつた第八次遣明船入明中の時期に相当する。したがって宗金が入明し、皇帝から段子・絹を下賜されたというのは、第八次遣明船の時であつたことが判明する。第九次遣明船でも宗金が入明したか否かについては、不明というしかない。第九次遣明船入明中の一四三六年（永享八）三月にも子の家茂が朝鮮に遣使していることからすると、^③宗金は再度入明していたのかもしれない。

おわりに

本稿の結論を要約して結びとしたい。宗金の朝鮮通交開始の契機は、従来から指摘されているように、一四二〇年の宋希璟の来日であつた。しかし、宗金は博多の僧から貿易商人に転化したというものではなく、応永外寇以前から博多と畿内を往来する廻船商人であり、当初から朝鮮通交の意志を持っていたと考えたい。

宗金の朝鮮通交は、一四二五年十月の受図書を境として、第一期Ⅱ受図書以前期と第二期Ⅱ受図書入明中に時期区分される。第二期は当然のことながら通交が増加し、通交形態も多様化する。また受図書入明の直接の契機は、直前の九州探題の没落に求めることが出来る。第一期は渋川氏およびその家臣と関係が深く、その朝鮮貿易を

担っていた可能性もあるが、第二期になると大友氏との結びつきを深め、最終的には大友氏領博多息浜の代官となった。

宗金の朝鮮貿易は、献上―回賜というレベルでの史料がほとんどで、その全貌はつかみがたい。しかし、断片的な関係史料からすると、献上―回賜による貿易よりも、それに付随する形で行われた私物の貿易の方がはるかに大規模であったと推定される。輸出品には、日本・中国・東南アジアといった国内外交易による様々な物資が検出されるが、その中心は日本産の物資で、とくに鉱産物が主要輸出品であった。また、中国産の物資が含まれていることは、日明関係断絶時に明―琉球―日本という交易ルートが形成され、日本人の唐物熱をある程度満たしていたことを推測させる。輸入品としては、木綿・正布・綿紬といった朝鮮産の繊維製品が主要なものであった。

宗金は、朝鮮貿易を活発に行いながら、一方で博多においては朝鮮通信使の接待・護送を熱心に行った。これは朝鮮の欽心を買ひ、貿易権を拡大・強化するという意図が背後にあったと考えられる。この他宗金は、来日した朝鮮通信使と貿易を行った可能性もある。また朝鮮に有効な日本情報を提供し、被虜人を送還した。これも通信使の接待・護送と同様の意図と考えられるが、こうした広範な活動によって宗金は朝鮮から厚い信頼を得たと考えられ、「宗金非¹⁸他倭比¹⁹也、国家厚待者」という朝鮮側の認識に至る。こうした認識の定着によって、宗金は最後の通交で大蔵経を獲得するのである。

宗金一族が日明貿易に深く関与したことは早くから指摘されているが、宗金の確実な入明は第八次遣明船によるものであることを明らかにした。ただし日明貿易活動の実態については明らかに出来ない。

〔注〕

- (1) 有光保茂「博多商人宗金とその家系」〔史淵〕一六輯、一九三七年。
- (2) 豊田武「日本商人史 中世篇」東京堂、一九四九年。なお、「豊田武著作集第三巻 中世の商人と交通」吉川弘文館、一九八三年に再録。
- (3) 田中健夫「日鮮貿易における博多商人の活動」〔同「中世海外交渉史の研究」〕東京大学出版会、一九五九年、初出は一九五三年。
- (4) 上田純一「妙楽寺と博多商人―応永の外寇をめぐる―」〔地方史研究協議会編「異国と九州」雄山閣出版、一九九二年〕。なお、私は円福寺僧宗金と博多の宗金を同一人と証明するには、まだ史料的に不十分であると考えている。
- (5) 中村栄孝「日鮮関係史の研究」上・中・下（吉川弘文館、一九六五―一九六九年）。
- (6) 田村洋幸「中世日朝貿易の研究」本論第四章、三和書房、一九六七年。
- (7) 有光有学「中世後期における貿易商人の動向」〔静岡大学人文学部人文学科研究報告「人文論集」二二、一九七〇年〕。
- (8) 佐伯弘次「中世都市博多と「石城管事」宗金」〔史淵〕一三三輯、一九九六年。なお、これとは別に佐伯弘次編「博多宗金関係年表」〔平成七年度科学研究費補助金（一般研究C）研究成果報告書「中世都市博多と日朝関係」代表佐伯弘次、一九九六年〕がある。
- (9) 宋希環著・村井章介校注「老松堂日本行録」跋語（岩波文庫、一九八七年）一八五頁。この点は注1有光保茂論文二〇四頁に指摘。
- (10) 「老松堂日本行録」、注1有光保茂論文二〇五―二〇七頁。
- (11) 「世宗実録」二年（二四二〇）十一月己丑条（中国・朝鮮の史籍における日本史料集成 李朝実録之部）（一）、国書刊行会、本稿における「朝鮮王朝実録」の引用はほとんど本書（一）（二）による。
- (12) 注1有光保茂論文二〇八頁。なお、宋希環は帰国後、日本への通信時に覇家台（博多）に住む「惟臥仇羅」が京都まで随行して使節のために功績があったことをのべ、恩賞を与えるように国王に啓した結果、綿布六匹が「惟臥仇羅」に給与された（『世宗実録』三年（一四二二）正月丙子条）。「老松堂日本行録」から確認される博多からの随行者には、禅僧無涯亮倪・宗金・「表三甫羅」（兵衛三郎か）の三名がいるが、いずれも「惟臥仇羅」とは音が一致しない。博多の「惟臥仇羅」がいかなる人物かは不明である。宗金が朝鮮政府から厚遇されたのは、「惟臥仇羅」と同様の理由が考えられる。

- (13) 川添昭二『対外関係の史的展開』一九八〇一九九頁、文献出版、一九九六年。
- (14) 『世宗実録』七年(一四二五)十月癸未条。
- (15) 『日鮮関係史の研究』上巻五三六頁。
- (16) 同前四五〇～四五四頁。
- (17) 本多美穂「室町時代における少武氏の動向」『九州史学』九二号、一九八八年。
- (18) 『世宗実録』十五年(一四三三)十月辛未条、同年十一月甲申条、十八年(一四三六)三月丁卯朔条。
- (19) 『世祖実録』元年(一四五五)七月丁酉条。ただし宗金の図書は、一四五五年(康正元)にすでに通交の実績がある家茂に継承されており(『海東諸国紀』)、末子には伝えられなかった。
- (20) 山田憲太郎「香料 日本のおい」一四八～一四九頁、法政大学出版局、一九七八年。
- (21) 扶と敷は朝鮮語でも音が共通するし、『世宗実録』六年(一四二四)六月己未条の渋川義俊献上品の中にも「朱折敷二十片」と見えている。
- (22) 小葉田淳「金銀貿易史の研究」法政大学出版局、一九七六年。
- (23) 『世宗実録』十年(一四一八)正月戊申条。
- (24) 同前二十九年(一四四七)閏四月庚申条。
- (25) 同前十六年(一四三四)正月庚寅条。
- (26) 注13川添著書二一～二二頁。
- (27) 注1有光保茂論文ほか。
- (28) 『世宗実録』八年(一四二六)十一月癸亥条。
- (29) 同前十一年(一四二九)十一月辛酉条。
- (30) 同前十五年(一四三三)十月辛未条。
- (31) 同前二十六年(一四四四)六月丁酉条。
- (32) 田中健夫注3論文。
- (33) 『康富記』嘉吉三年五月六日条、同六月十九日条。

- (34) 『世宗実録』十六年（一四三四）正月庚寅条。
- (35) 同前十年（一四二八）七月甲子条。
- (36) 同前十年五月戊午条。
- (37) 同前十年八月乙巳条。
- (38) 同前十年十月甲辰条。
- (39) 同前十年八月乙酉条。
- (40) 同前十年十二月辛卯条。
- (41) 同前十一年三月癸酉条。
- (42) 佐伯弘次「大内氏の筑前国支配―義弘期から政弘期まで―」（川添昭二編『九州中世史研究』一輯、一九七八年）。
- (43) 『世宗実録』二十一年（一四三九）三月癸亥条。
- (44) 同前十年（一四二八）七月甲子条。
- (45) 同前二十九年（一四四七）五月丙辰条。
- (46) 有光保茂注「論文」二四頁。
- (47) 『世宗実録』十五年（一四三三）十一月甲申条。
- (48) 同前十八年（一四三六）三月丁卯朔条。
- (49) 同前二十九年（一四四七）閏四月庚申条。

〔付記〕

本稿は平成七年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）「中世都市博多と日朝関係」、および平成九～十一年度文部省科学研究費補助金（基盤研究B）(2)「前近代東アジア海域における交易システムの総合的研究」（代表…安藤保）の成果の一部である。